
紅魔館のメイドの休日

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅魔館のメイドの休日

【Nコード】

N3887F

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

メイドとしての仕事に忙殺される咲夜に、レミリアがいきなり持ちかけた『休暇』。咲夜は戸惑いながらもこの申し出をありがたく受ける。一日お休みをもらった咲夜は、ちょっとおしゃれをして人間の里に出かけたのだった……。

紅魔館のメイドの休日：第一話（前書き）

前回はシリアスっぽいのがだったので、今回はキャラの日常にスポットを当てた、ほんわかした感じのお話にしてみました。

咲夜さんファンならずとも、一度読んでみてくださるとうれしいです。

紅魔館のメイドの休日：第一話

「休暇ですか？」

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜は主人の言葉に戸惑いの声を上げた。「そうよ。あなたもここに来てずっと働きづめだったし、人里にでも出てちよつと息抜きしてきなさい。まあ、お休みあげられるのは一日だけけど」

紅魔館の主、レミリア・スカーレットは尊大な口調でそう言う。

レミリアはメイドである彼女だけでなく、誰に対してもそんな感じだ。見た目、10歳ぐらいのちんちくりんの小娘なのに。

咲夜は意外な主人の申し出に少し困惑したが、

「お嬢様がそうおっしゃってくださるなら、休暇を取らせていただきます」

と返事した。

「ふう」

今日の仕事を済ませ、自室に戻った咲夜はいつものように今日もお疲れ様、のため息を自分についた。

頭に乗つけたカチューシャを外し、ぼすん、とベットに放り投げて自分の身もベットに投げ入れる。

「休暇。休暇ねえ」

ベッドの上で、咲夜はつぶやいた。

もうここに勤めてずいぶんだったが、そんなことをわざわざいわれたのは初めてだった。

メイドの仕事は楽ではなかったが、家事は嫌いな作業でもなかったし、無茶を言うお嬢様たちの面倒を見るのも、慣れてくればそれなりに愉しかった。

仕事の厳密な勤務時間は決まっていないので、息を抜こうと思えば

いつでも適当に休憩は取れるのだが、館から出るような休暇は取ったことがない。

咲夜が館から出るのは、必要な食料品や生活用品を買いに人里に降りるときだけだった。

「まあ、せつかくあいつてくれてるんだし、一日人里でいろいろ見て回るのもいいかな」

と、一人ごちているうちに気づいた。

メイド服とパジャマ以外、自分の服を持っていないことに。
「・・・・・・・・」

衣服にはさほど頓着のない咲夜だったが、さすがにせつかくもらった休みの日までメイド服で過ごしたい、とは思わなかった。

しかし服を借りようにも・・・あの小さなお嬢様たちのお洋服を、咲夜が着れるはずもない。

しかたない。

咲夜はベッドから起き上がり、クローゼットの中から着古して処分する予定だったレミアの服と裁縫箱を取り出すと、それをはさみでじよきじよきと裁断し始めた。

で、数時間後（実際は時間を止めたので、もうちょっとかかった）。

「ふん・・・まあ、こんなものかしらね」

自分で作った淡いピンク色の、シンプルなデザインのワンピースを試着してみた咲夜は、自分の姿を鏡で映してみた。

せつかくなので少し雰囲気を変えてみよう、いつも左右で結っているみつあみも解いて下ろしてみる。

鏡に映った自分のその姿は、まるで別人のように思えた。
いや。

いつか、どこかで見たことがある。
もうずいぶん昔。

幻想郷に来る前の、自分の家の鏡の中だ。

ワンピースなんて着るのは、何年ぶりだろう。

似合っているのか、咲夜は自分で自信がなかったのだが……。
緩やかに波打ったプラチナブロンドの髪を下ろし、清楚な感じのワンピースを着た咲夜は、どこぞの深窓の令嬢のような雰囲気をも
し出していた。

今の咲夜がレミリアとフレンドールを伴ってこの姿で街を歩けば、
何も知らない人間は『大人びた美しい令嬢と、いたずら盛りのその
妹たちのお散歩』とも思うに違いない。

「これでいいかな……」
悪くはないだろう、と思えた咲夜は、パジャマに着替え、明日を思
い、少しわくわくしながら眠りについた。

咲夜は朝の8時という、いつもよりかなり遅い時間に目を覚ますと、
まず顔を洗い、それからダイニングへ向かった。

先に来ていたお嬢様に「おはようございます」と挨拶する。
今日の朝食の用意は、数だけは十二分にいる妖精メイドたちにお任
せだ。

咲夜は用意しようとしたのだが、レミリアが「今日はあなたは休み
なのだから」と仕事を遠慮させたのだ。

いつもならきれいに焼けた食パンに、ベーコンエッグとりんごジュ
ースぐらいは出てくるのだが、妖精メイドたちは咲夜の指示なしで
はそんな器用なマネはできないらしく、ロールパンがテーブルの上
に山盛り置かれてあるだけだった。

ジャムもバターも出ていない。

「……やっぱりこの館は、咲夜がいないとともならないわね……」
「
味気ないロールパンをかじりながら、レミリアがそうつぶやく。

同じく味気ないパンをかじりながら「はあ。恐縮です」と咲夜が返
事をする。

今日の仕事はこの妖精たちにさせるつもりだ、とレミリアは言っ
ていたが、大丈夫なのだろうか。

食事を終えた咲夜は、一抹の不安を覚えながら『文々。新聞』を読んでいるレミリアを横目にダイニングを出たのだった。

「では、いつてきます」

昨日こしらえたワンピースに着替えて出かける準備を終えた咲夜は、玄関まで見送りに来てくれたレミリアと、そしてたくさん妖精メイドたちに挨拶を送った。

「いつてらっしゅい」

と無邪気に挨拶を返す妖精たち。

「まあ、楽しんでいらっしゅい」

珍しく裏のない笑顔で送り出してくれるレミリア。

咲夜は彼女たちに手を振りながら、紅魔館を出発した。

見慣れた風景なのに、仕事で来たときと遊びに来たときとまったく違う感じがする、というのは働いたことのある人間なら一度は経験があるだろう。

往來を行きかう人々（たまに妖怪も混じっているが）。

その人々に元気に声をかける行商人。

ちゃんばらごっこでもしているのだろうか、棒を振り回しながらものすごいスピードで元気に走り回り、大声を出して遊んでいる子供たち。

仕事で買い物に来ているたびにもみているはずだが、なぜか新鮮に感じられた。

（さて）

どうしようかなあ。

いったことのない、装飾品の店でも覗いてみようかな。

そう思った矢先だった。

「おじよ〜さん！」

いきなりうしろから声をかけられた。

振り向くと、どこにでもいる、ろくでなしの類の3人組の男が立つ

ていた。

「見ない顔だね、一人？」

一人がなれなれしく咲夜の肩に手を置きながら、そんなことを言うてくる。

男は見ない顔、などといったが、咲夜は男たちの顔を知っていた。以前、今回と同じようにやつらが女性に不埒なマネを働いていたところを、偶然咲夜が通りかかり、一発ずつ死なない場所にナイフを埋め込んでやったことがあった。

今日は少しいつもと違った雰囲気の格好をしているためか、男たちは咲夜だと気づいていないようだ。

「ひよつとして外の世界から迷い込んだ、とか？俺たちがいろいろ案内してやるうか？」

下卑た笑みを浮かべる男たち。

また痛い目にあわせてやるうか、とも思ったが、せつかくの休日に騒ぎを起こす気にもなれなかった。

「その・・・そんな。困ります」

咲夜が遠慮気味にそういうと、男たちは付け上がったのか、

「うひょ〜っ！『こまりますう』だって。かわいいなあ。俺たちはなんもこまらねえよ！さ、ついてきな！」

と無理に咲夜の手をとろうとする。

もう限界だった。

「・・・私の顔をよく見てみる」

咲夜がそうすごんでも、

「んん〜？そのかわいい顔をよくみてどうするの？ん？キスしていいとか？」

一人の男の言葉に、残りの男たちがげらげら笑う。

・・・まだ、気づかないらしい。

しかたない。

咲夜は男から手を払うと、どこからともなく、手品のようにナイフを取り出し、男の首元にそれを押し当てた。

「ひつ・・・な、なにする・・・！」

「・・・またナイフをその体に埋め込まれたいわけ？」
さすがに鈍い男たちも、気づいたらしい。

「げ・・・」

「紅魔館のメイド・・・」

「十六夜咲夜だ・・・」

男たちは顔をあわせ、

「あ、いや。咲夜さんとは分からなくて・・・へへ・・・」

「メイドのかっこうしてないなんて、反則だ！十六夜咲夜ならちゃんとメイド服着てくれよ！メイド服以外は着ないものだと思っ込んでいたのに！裏切り者！」

「だいたい十六夜咲夜って自縛霊の一種で、紅魔館からは吸血鬼の許可がないと出られないとか何とか聞いたことが・・・」

「え？俺、十六夜咲夜はゾンビの一種だって聞いたことがあるぞ？」

「俺は未来からやってきたメイド型ロボットだとか何とか。ポケットから何でも出てくるらしい」

「頭のイカレタ科学者が作ったホモンクルスってうわさも・・・」

「・・・と、好き勝手に言いはじめて盛り上がりかけているの？
つてか、そんなうわさが流れているの？」

大体その、裏切り者ってなによ？

「逃げる〜！」

何か少し言い返してやろうと思っていると、男たちは脱兎の勢いで逃げていってしまった。

根も葉もないうわさに、ちょっとだけ傷ついた咲夜だった。

後半へ続く。

紅魔館のメイドの休日：第一話（後書き）

本当はひとつのお話にまとめるつもりでしたが、少し長くなりそうなので2つに分けることにしました。

もう筋書きはだいたい頭の中にまとまっているので、近いうちに後編をお披露目できると思います。

ぜひ、ご期待ください。

紅魔館のメイドの休日：第二話

そのあとも、咲夜に声をかける男は後を立たなかった。

十六夜咲夜だ、と名乗ると男たちは『あの十六夜咲夜・・・サーセン』と、ケンカ売った相手がやくざだったような豹変振りを見せて去っていった。

『紅魔館のメイド』

『完璧で瀟洒な従者』

この二つ名を知らない人間（妖怪もだろう）は幻想郷にいないはずだ。

中にはトチ狂って『あなたの美しさには前から・・・』などとほざくバカもいたので、とりあえず足元にナイフを投げつけてやった。まったく物好きもいるものだ、と咲夜はあきれた。

お茶所の前を通ると、男たちが数人、縁台に集まってなにやら騒いでいる。

ここはたいてい数人の暇な男たちが集まって、何か騒いでいるようだった。

気にはなっていたが、通るときはいつも仕事なので、素通りしていたのだ。

のども渴いたことだし、興味に駆られて少し覗いていくことにする。「ちよつと、ごめんなさいね」

いきなり割り込んできた美少女に驚く男たちにもかまわず、咲夜は人垣の隙間からひよい、と縁台を覗き込んだ。

（・・・チェス？）

そう、そこでは二人の男がチェス盤のようなものを挟んでわいのわいの騒ぎながら、小さな木の駒を動かして遊んでいるように見えた。その駒はチェスの駒に比べて、ずいぶん平べったい。

「・・・ん？咲夜ちゃんじゃないの。どーしたの今日は。ずいぶん

おしゃれして」

チエスっぽいもので遊んでいた男の一人が顔を上げると、馴れ馴れしく咲夜に声をかけた。

咲夜の知らない顔だった。

若い。

まだ20代前半、いや、ひよつとしたらまだ10代後半なのかもしれない。

咲夜の目から見てもずいぶんハンサムで、着流しを着て扇子を持っているその容貌が、どうにも不自然に見えた。

どちらかという流行の衣服を着込んで、モデル雑誌にでも出ていそうな雰囲気だ。

その男の言葉に、周りの男たちがざわつく。

「ええ？十六夜咲夜だったのか」

「俺はてつきり、どこぞのお嬢様かと思ったよ」

「メイド服以外、初めてみたかもしれん」

などと周りの男たちが騒ぎ始める。

「まっさん、よく気づいたなあ」

その若い男は、まっさんと呼ばれているらしかった。

「ん・・・まあ、女にはろくな目にあわされないから、勝手に気をつけて特徴を覚えちまうんだろうよ。なんだ咲夜ちゃん。今日は誰かとデートかい」

もう咲夜のほうには目もくれず、彼の視線はチエス盤っぽいほうに戻ってしまった。

「いや、ただの休暇だけど。それ・・・」

咲夜が今プレイしているゲームに興味を向けると、男は急に視線を咲夜に戻した。

「お、咲夜ちゃん。将棋知ってるのかい？」

「シヨーギ？いや、知らないわね。似ていそうなゲームで、チエスなら知ってるけど」

咲夜がそう答えると、まっさんと呼ばれた男はなぜかうれしそうに、

「チェス指せるのか。そりゃあいい。似たようなゲームさ。ルール教えるから一局やろう」
などという。

対局していた相手が「おいおい、まだ俺とやってるだろう」と不平をもらす。

しかしまつさんは

「ああ？まだ指すのか。もうこの局面は『オワ』だろ。はいはい、終わり」

と勝手に局面を崩してしまった。

「まったく勝手に・・・」

まつさんと対局していた男はぶちぶち言いながらも盤の前から退去した。

結局、敗戦濃厚の局面だったのだろう。

「さ、咲夜ちゃん。座りな。ルール教えてやつから」

チェスが好きだった咲夜は、促されるままとりあえず盤の前に座ることにした。

「これがビショップでこれがルークの動き？それにポーンの働きがチェスとまったく違うんだけど」

「そうなんだが、せめて角と飛車といっけてくれ。それにそれはポーンじゃない。歩って言うんだ」

「これとこれとの違いが分かりづらいわね・・・」

「まあ、その動きをする駒はチェスにないからな・・・。こっちは金きんで動きのイメージとしては十字に動く。こっちは銀ぎんって言うてイメージとしてはエックス状に動くんだ」

「分かったわ。で、もう一度確認するけど、取った駒を使っていいのね？」

「ああ、それがチェスと将棋の一番の大きな違いだな」

将棋とチェスはルーツは同じとはいえ、やはり違うゲームなので少々の齟齬はあったが、咲夜は何とか理解した。

駒の動きだけを見ていると、なんだかチェスより単純そうに思える。なんせ、このシヨージというゲームには四方八方に動けるクイーンがない。

チェスより派手さがなさそうね・・・と思っていると相手が「お願いします」と頭を下げた。

このあたりはチェスも変わらない。

咲夜もお願いします、と頭を下げる。

「先手いきなよ」とまつさんは勧めてくれたが、なぜか咲夜は時間を止めたように動かない。

「・・・どうした？」

「・・・序盤がまるで分からないわ」

チェスは序盤の定跡化が相当進んでいて、そこで間違えると上級者同士の対局では逆転することは難しいぐらいだ。

しかし、咲夜の言葉にまつさんは苦笑すると

「オープニング、なんてしゃれた言葉やめてくれよ。序盤なんてどー指しても一緒だよ。将棋は知識じゃねえ。将棋は腕力だけ」

なんてことを言う。

将棋は腕力、ねえ。

似たような言葉をどこぞの魔法使いから聞いたような気がした咲夜は、とりあえずポーンを動かすことにした。

「参った。こりゃ参った」

まつさんは驚きの声を上げた。

こっちが負けているわけではないが、初めて将棋を指す少女がチェスの下地があるとはいえ、終盤の入り口まで相当将棋にのめりこんだ自分と互角に指しているのである。

「序盤はなんてめっちゃくちゃな将棋指すんだ、と思っただけど・・・」

「中盤の読みと腕力はたいしたもんだな。さすが紅魔館のメイド」

紅魔館のメイドは関係ないような気もしたが、周りのギャラリートちも感嘆の声を上げる。

咲夜は指し進めるうちに、チェスとの相違点が分かってきた。なるほど、駒の動きは確かに地味だが、持ち駒が使えるというルールによって変化はチェスと同じぐらい、もしくはそれ以上に精密な読みが必要とされる局面もある。

盤上から駒が減らないので、ステイルメイトやドローになる可能性が極めて低い。

チェスと同じく、マテリアルアドバンテージをもたれてはいけない。無条件のプロモーションを許すときつくなるのも同様だ。

特にフという駒のプロモーションを許してはいけない。

5倍も動きが増えたのなら、それはもうマテリアルアドバンテージを相当譲ったのと同じ結果になるだろう。

感覚的にここまでは互角。

幻想郷に来る前にチェスを指していたときは「あの子は終盤で間違えない」といわれていたぐらいだ。

勝てるかもしれない。

巫女や魔法使いを弾幕で叩き落したときのような高揚感が、咲夜を包む。

それは彼女にとって、なかなか幸せな感覚だった。

ああ・・・私はなんだかんだ言って、勝負事が好きなのだ。

そうでないなら、わざわざ紅魔館で弾幕なぞ張らず、ただのメイドをやっついていればいいのだから。

(いやまあ・・・しかし)

真剣に盤を覗き込む咲夜を見て、彼は不思議なくつつかの感情に襲われた。

昔は俺も、ああやって真剣に指していたような気がする。

彼は夢破れて、そして同時に恋人を失って失意のどん底にいた1年ほど前に、偶然に偶然が重なってこの幻想郷に迷い込んだ。

拾われた巫女に自分がどういう状況に置かれているか説明を受けた

上で『帰りたいか?』と聞かれたが、彼は即刻拒否した。
もう競争はたくさんだったし、カネの切れ目が縁の切れ目の男女づ
きあいにもほとほと疲れ果てていた。

ここはいい。

ここには激しい競争もない。

男たちは男の役割を果たし、女たちは女の役割を果たし、どっちが
上だ、どっちが下だ、などと競わずに痴話げんかをしながらも晴耕
雨読的な生活に満足し、うまくやっている。

あつちの世界では考えられないぐらい、幻想郷の女性たちは質素で
よく働く。

『名人になって楽させてやる、って言うてたから誕生日も3万円で
我慢してあげてたのに。もう知らない。今から懸命に働くから?大
体それぐらいの稼ぎで、どうやってあたしを幸せにするのよ。バカ
にしないで』

別れ際に彼女に言われた一言は、きつと一生忘れないだろう。

ハンサムな彼はこちらに来てからも相当に女性にもてたが、てきと
ーに理由をつけてすべて断っていた。

まだ、傷が癒えていない。

もうしばらく、女は要らない。

しかし、そんな彼でも盤上没我の咲夜を見て、

(・・・美しいな)

と、柄にもなく思ってしまった。

さすがに終盤に入るとチェスのエンドゲームとはまた感覚がまった
く違い、年季に勝るまっさんが怒涛の攻めで咲夜玉を追い詰めた。

あと9手進むと、自分のキングはチェックメイトだ。

どう受けても、それは変わりそうにない。

(これは負けね・・・)
うん、でもシヨーギってゲームもチェスに負けなくらい、面白かったわ。

それはいいのだが・・・どうやって負けを宣告するのだろうか？
チェスの場合は自分のキングを倒して投了を告げるのだが。

将棋の駒はもともと平べったいので、倒すようなことができない。
投了のマナーが分からなかったので(負けたとたんに盤上の駒をぐしゃぐしゃにして去るやつは古今東西どこにでもある。淑女の咲夜はもちろんなそんな不躰な振る舞いをしたことはなかったが)、咲夜は玉将の上に細い指を置いて

「Resign」
と告げた。

咲夜の不思議な動作に周りにはきよとん、としたが、チェスも少しは知っているまつさんは

「咲夜ちゃん。投了するときには将棋の場合、駒台に手を置いて負けを宣告するんだよ」

と親切に教えてやる。

咲夜は律儀に駒台に手を当てると

「負けました」

と、きれいな声で投了をつけたのだった。

続く

紅魔館のメイドの休日：第二話（後書き）

ああああああああ。
すみません。

また趣味に走ってしまった・・・。

しかも中編って。

すみません、まだ続きます（謝ってばかりだ・・・）。

いやまあ・・・二次創作ってのは一種の同人ですし、自分の趣味に走っても許されますよね！

・・・ダメな人、サーセン。

ちなみに私はチェスは駒の並べ方と動かし方を知っている程度の能力です。

キャスリングとアンパサンのルールを正しく理解しているか、怪しいです。

将棋は何とか中級者程度の能力です。

あんまり強くないです・・・。

典型的な下手の横好きですな。

ここからは個人的な完全妄想の話なのですが、咲夜ってチェスが似合うような気がするんですよね。

メイド服とチェスエプロンドレス、という組み合わせは『不思議の国のアリス』のイメージがあるからでしょうか。

今イラスト練習中なのですが、チェスと咲夜のイメージを具現化したイラストをいつか描きたい、という野望を持っております。

ちなみに私はえーりんファンでもあるわけですが、彼女には囲碁のイメージが・・・。

えーりんのコスミとか。
うん、きつとこんなことを妄想してる東方ファンは、あんまりないだろうな。

次が一応、最終話の予定です。

最終話終わったらまた趣味に走って咲夜とまつさんが指していた将棋を詳しく書いたスピニアウト作品をひとつ書く予定です・・・
読んでくれる人、いるかなあ・・・？
まあ、私の二次小説を読んだのが運のつき、とあきらめて最後までお付き合いくださるとうれしいです。

感想批評お待ちしています。

紅魔館のメイドの休日：第三話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人は、お読みにならないほうがよろしいかと思えます。

あと、小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

紅魔館のメイドの休日：第三話

「この手がおかしかったかしら」

咲夜はチェスでも post mortem（チェスで使う場合感想戦、と訳せるが、本来の意味は検死である）を欠かしたことがなかった。

負けたチェスを post mortem で反省する。

相手に読み筋を教えてもらう。

これが最良の上達法だった。

「そうだな、終盤の入り口ではないな」

「なら、こう？」

「それもなあ……。俺はこう読んでいたんだが」

「それで……こうこうこうこうこうこう、か。これで私がいい？」

「いいとまでは言わんが、互角だろうな」

幻想郷に将棋は昔からあるのだが、閉ざされた幻想郷に将棋の強い人間は現れようがなかったし、新しい定跡の情報はもちろん手に入れようがないので、たいていの人間は駒の動かし方や並べ方を知っている程度である。

しかし、娯楽に乏しい幻想郷では、いまだにたくさんの男性が将棋を楽しんでいた（少女たちには弾幕ごっこという楽しみがあったが）。

二人はほとんど駒を動かさず、指と口を動かしているだけで感想戦を進めている。

頭の中で駒の動きが再生されるので、いちいち実際に動かす必要がないのだ。

二人の感想戦は結構レベルが高く、二人の将棋を見守っていたギャラリィには、彼らがなにを言っているか、分からなかっただろう。

「いや、驚いた。強いな。どこでそんな棋力を？」

「ん・・・まあ、子供のときにチェスやってたから。それだけ」
あまりそのことに触れたがらなさそうな咲夜に、まっさんはそれ以上突っ込むのはよすことにした。

「そうか。ちよつと待てよ」

彼はそういうと、足元においていた麻の袋から、3冊の本を取り出して、それを咲夜に差し出した。

本といっても現在の日本で見られるようなきちんと製本された本ではなく、時代劇に出てきそうな、閉じ口を紐で結んである、紙こそ新しいものの、古めかしさを感じさせる本だった。

幻想郷では、よく見られる製本スタイルである。

タイトルは『まっさんの相居飛車の基本』『まっさん流振り飛車破り』『やれば強くなる・まっさんの7・9手詰詰将棋』。

「勉強したらもつと強くなる。今の将棋を見た限り、咲夜ちゃんはチェス仕込みの攻め将棋だから、居飛車のほうがあっていると思う。暇なときにでも読んでくれ」

メイドの仕事に戻ったらこんな本を読むヒマがあるとは思えなかったが、せっかくの善意を断るのも申し訳ない、と思い、

「ありがとう」

とそれを受け取った。

それからが大変だった。

将棋を指す女の子（しかも美少女）というのは幻想郷でも珍しいらしく、『俺も十六夜咲夜と指してみたい』というのがあとを絶たなかったのである。

「お前らじゃ5分で木っ端微塵だぞ」

とマッさんが言っても、

「駒落ちなら」

と男たちも譲らない。

駒落ち、というのは将棋のハンデキャップのことで、強いほうが駒を最初からいくつか除いて戦う将棋のことである。

「プロでもない10代の娘に駒落してもらおう大の男、つてのもど
うなんだよ・・・」

ポツリつぶやくマツさん。

幻想郷生まれの男たちからすれば、あの十六夜咲夜にならハンデつ
けてもらっても恥ずかしくない、という感覚なのかもしれない。

こつちに来て一年ぐらいのマツさんには、ちょっと理解できない感
覚だったが。

「とまあ、こんなこといつてるが。かまわないか、咲夜ちゃん」

実は咲夜は実害がない限り、頼まれたら嫌、となかなかいえない性
格なのである。

それではないと、あのわがままお嬢様の相手をしてもらえない、とい
うことだ。

「いいけど・・・」

別に予定があつたわけでもない。

それなら子供のころを思い出しながらショーギに興じるのも悪くな
い、と咲夜は思った。

ハンデをつけても、咲夜は男たちにほとんど負けなかった。

飛車と角を外して指せ、とまつさんに言われたときは「クイーンが
ないような状態で、これでチェスになるのかしら・・・？」と思っ
たが、結局は咲夜の勝ちになった。

ポーンのプロポーションと持ち駒再利用のルールはすごい、と思っ
た。

希望者全員と指し終えたころには、もう陽が暮れかかっていた。

「お、いい時間になったな。お疲れさん、咲夜ちゃん。バンメシ
の予定は？」

10局以上指し終えた咲夜に、まつさんがそうねぎらいの言葉を掛
けた。

夕食は外食してきていい、とレミリアの許可は取ってある。

明日からまたメイドの仕事に戻ってもらうから、それに差し支えな

い時間に帰ってきなさい、とのことだった。

「今日は外食の予定だったの」

咲夜がそう答えると、まっさんは笑顔で

「そうか。それならうまい蕎麦とてんぷらを食わせるなじみの店に行こう。半日へボの相手で疲れたろ。俺おごるから」
などという。

咲夜が返事する前に「まっさん、俺たちもおごってもらえるんだよな」などと野次を飛ばす周りの男たち。

誰も本気でそんなことを口走っていないのは、明らかだったが。

「バカヤロ。何で俺がおごらないといけないんだ。むしろお前ら、咲夜ちゃんに今日の将棋の授業料払うぐらいのつもりでついて来い」
冗談っぽくいうまっさん。

このまっさんという男、若くて端正な顔のくせにオヤジ言葉でしゃべるので、違和感こそ感じさえるが、嫌味な感じはまったくなくない。

今日将棋を指していた男たちの中には、彼よりはるかに年上の男性も居たが、彼がそういった人たちにも好かれてる理由のひとつがそれだろう。

まあ、幻想郷では見た目は若い女の子がえらそうに話している、というのが日常茶飯事の光景だから、違和感を感じないだけかもしれないが。

「さあ、いくか」

まっさんが先頭を切って歩き出すと、男たちがそれにぞろぞろ続く。咲夜もそれについていくことにした。

連れてこられた蕎麦屋は、ちょっとした接待などに使えそうな、結構高級な店構えだった。

「おーい。来たぞ」

まっさんは何の遠慮もなく引き戸を開けて中に入っていく。

「あ、先生。いらっしやい」

厨房で蕎麦を打っていた店主が、まっさんを『先生』と呼んで出迎

える。

これには咲夜も少々驚いた。清潔だが決して高級そうには見えない着流しを着て、扇子を持ち歩いているまつさんの姿は、どう見ても『先生』という感じがしない。それならまだ、寺子屋で子供たちに授業している上白沢 慧音のほうの方が先生らしく見える。

「今日はまたたくさん生徒さんと・・・おや、ずいぶん綺麗どころをつれていらっしやいますな。コレかなにかで？」

店主は下世話な笑みを浮かべて小指を立てる。

「いや、そんなんじゃない。さっきまで一緒に将棋を指してたんだ。咲夜ちゃんも座りな」

まつさんがカウンター席に座りながらそう説明して、咲夜のために自分の隣のイスを引いた。

小さいころのクセが出て、一礼してから咲夜はそこに腰掛ける。

一緒に来た男たちも、三々五々、適当な席に座り始め、急に増えた客に女性店員たちが慌しく動き始めた。

「へえ、女の子で将棋を指すのは珍しい。しかし・・・」

店主は打ち終わった蕎麦を今度は包丁で適当な太さに切っていく。見事な手際だった。

店主は蕎麦を切り刻み、首をかしげながら、

「そちらの女の子はサクヤさん、っていうんですか。確か紅魔館にそんな名前のメイドがいましたな。なんでもそのメイド、夜な夜な得意のナイフを使って主人の吸血鬼の食事のために、人間狩りを行っているとかいいうわさがありましたなあ。まあでも、あの事件以降、吸血鬼もおとなしいし、そのメイドも里の人間と仲良くやっているとか聞きますがね」

なんてことを言う。

「・・・その十六夜咲夜なんだけど」

ポツリ、とつぶやく咲夜。

「・・・」

凍る厨房。

つてか店主。

店主はなぜか

「・・・ゆっくりしていつてね!!!」

と叫ぶと、切り終えた蕎麦を大きな箱に移し、すたこらさつさと店の奥に引っ込んでしまったのだった。

その様子を見ていたまっさんは、さも面白そうにげらげらと大きな声で笑っていた。

「まったく、先生も人が悪い」

将棋盤と一緒に盛りのいいざる蕎麦とつゆを持って出てきた店主は、ちよつとおっかなびっくりしながら咲夜の様子を見て、咲夜とまっさんの前にそのざる蕎麦を置き、まっさんを咲夜と挟むようにしてカウンター席に腰掛けた。

「いやいや。咲夜ちゃんが里で買い物しているのもちよくちよく見かけてたし、俺も彼女がいろいろ言われてるのは知ってたよ。でも将棋を指す人間に、悪いやつはいないって。実際話してみても、悪い娘こじゃなかったしな」

「・・・まったくですな」

将棋を指す人間に云々、は何の根拠もないことだったが、どこの世界でも同じ趣味を持った人間同士は、悪く言わないものである。

咲夜はというと、出されたざる蕎麦を何か非常に珍しいものを見るような目で、じつとそれを見つめていた。

「ゴンさん最近腕上げてるからな。もう4枚落ちは卒業かな。今日は2枚落ちで」

「ありがとうございます。では2枚落ちをお願いします」

「はい。お願いします」

二人は挨拶を交わすと、まっさんのほうが駒を2枚落として対局を始める。

咲夜がじつとしていたのに気づいたまっさんは、

「咲夜ちゃんは育ちがいいんだな。俺らに気を使わず、先食べてくれ」

と苦笑いを浮かべながら咲夜に箸を促す。

「・・・どうやって食べるの、これ」

咲夜はまるでブリキ人形のように、首をギギギ、といわせるような感じでまつさんのほうを向いた。

「・・・え？咲夜ちゃん、蕎麦食ったことないの？」

まつさんの驚きの声に、こくり、と初恋を自覚した少女のように顔を赤くしながらうなづく咲夜。

無理なからぬことだった。

幻想郷に来てからもお嬢様たちに合わせて洋食を作っていたし、咲夜自身もそれに食生活を合わせていたものだから、純和風の蕎麦なんて食する機会はなかったのである。

咲夜の中では、メンといえばパスタだった。

「まあ、咲夜ちゃんあんまり日本人っぽくないもんな。これはこうやって食べるんだ」

まつさんは駒と箸を持ち替えると、もりのいい蕎麦の中に箸を突っ込み、蕎麦を持ち上げてつゆにつけてずるずると一気にすすった。

そんな食べ方なのに、まったく辺りにつゆが飛び散らない。

相当食べなれているらしい。

「さ、やってみな」

咲夜は恐る恐る箸を手にとると（箸はさすがに幾度か使ったことがあった）、まつさんと同じように箸をそばの中に突っ込み、明らかに慣れていない動作でつゆの中にそれを入れる。

それを口に運び、一気に・・・
「・・・？・・・？」

蕎麦を口にくわえたまま、首をかしげまくる咲夜。

すすれない。

どうやったたらまつさんのようにすすれるか、咲夜には分からなかつ

たのである。

「・・・ガイジンさんは蕎麦すすれないって聞いたことがあるけど、ホントだったんだな・・・。食文化の違い、ってヤツだな。咲夜ちゃん、仕方ない。箸をフォークのように使って、くるくると蕎麦をまいて口に入れきりなよ」

仕方なく咲夜は言われたとおりに箸で蕎麦を巻き取り、結局パスタのような食べ方で蕎麦を口に入れる。

「どうだ？」

「・・・おいしいわ」

思わぬ形で恥ずかしい思いをした咲夜だったが、確かに蕎麦の味は悪くないものだった。

続く

紅魔館のメイドの休日：第三話（後書き）

すみません。

お待たせした謝罪と、またもや前中後から話数方式への変更のお詫びです……。

本作『紅魔館のメイドの休日』は一月以上振りの更新となりましたが、楽しんでいただけたでしょうか。

『蕎麦が初めての外人さんは、それをすすって食べられない』というネタは、だいぶ昔に読んだ『馬なり1ハロンシアターズ』という競馬のマンガからアイデアを拝借しました（確かジャパンカップに来た外国馬に日本の出走馬が蕎麦を振舞う、というネタだったと思う）。

確かにパスタとかは、すすって食べませんものね。そういうことも、あるかもしれせん。

あと、ちよつと深刻な話。

どうやら私、東方のキャラを相当違った捉え方をしているようで、あるサイトでSSを投稿してみたところ、あまり評判がよろしくありませんでした。

まあ……原作をやりこんでいないのが原因かな。

シューティング苦手なんですよね……。

いろんなサイトを回って自分なりに情報を集めているつもりですが、やっぱり原作を知らないと、二次創作というものは書き込めないものなのかもしれせん。

それでもいいよ、気にしないで読むよ、という心の広い方は、私独特の東方ワールドに、これからお付き合いください。

もちろん私も、東方をもつと知る努力は怠りませんので。

いや、努力つてのもおかしいな。

もつと東方の魅力を知って、魅力のある二次創作を作りたい、と思っ
ていますので、皆さんの応援、よろしく願います！

ではまた、次回作でお会いしましょう。

お読みいただき、ありがとうございます。

感想批評、お待ちしております。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻楽団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方
が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びまし
た。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみ
てください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしやる弾幕型格闘ゲーム（？）
です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。
こちらもぜひ、プレイしてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887f/>

紅魔館のメイドの休日

2010年10月9日23時47分発行